

放蕩息子（ルカ 15・11-32）

有名なイエスのたとえ話。

もらった財産を使いつくして、無一文になって帰ってきた息子を父が暖かく迎えてくれた。という話ですが、実は「父の深い愛」の話ではありません。

ルカの 15 章には「放蕩息子」の前に「迷った羊(15・4-6)」と「紛失した銀貨(15・8-10)」の話があります。これらの三つの話は実は同じことを言っています。「放蕩息子」を前の二つの話と同じように読むことが大切です。

つまり「失った羊」「失った銀貨」「失った息子」というように読むことです。息子が主人公の話として読むとわかりにくくなってしまいます。父親の立場に立って読むことです。

父親にすれば息子はもう帰ってこない、死んだものと思ってあきらめるしかなかったのが、ある日突然、その息子が帰ってきたわけです。文中の「死んでいたものが生き返った」という言葉はその気持ちをよく表しています。

それに対して「私には子やぎ一匹さえくださりませんでした」という兄への、一見不公平な処遇(?)はなぜでしょうか。

それは父親にとって弟は「失われた羊」であり、兄は「ほっておいても心配のない 99 匹の羊」を表しているからです。だから失われた一匹がみつかったのだから喜ぶのは当然だと父が言っているわけです。

それから、このときの、心から悔い改める気持ちを表している息子の言葉は、まさに私たちが唱える祈りのことばです。

「父よ、私は天に対しても、あなたにむかって罪を犯しました。もうあなたの息子と呼ばれる資格はありません。」

イエスは「(このように) 罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない 99 人の正しい人にもまさる大きな喜びが天にある。(15・7)」と言っています。

父親（父である神）の喜びとはこの喜びのことなのです。

これが放蕩息子の話です。